

目的 入浴後被服のあり方を考える基礎資料として、温水による体加温を行ない、加温前後の皮膚温をはじめとする生理反応を観察した。

方法 被検者は19~30才の女子で、健常者4名、冷え症自覚者3名である。加温条件は、水温 41°C ・ 38°C 、浴剤なし・あり(0.08 g/l)の4条件で、いずれも加温時間は10分とし、加温中に心拍数、温冷感、快適感を測定した。加温前30分間と加温後60分間は、ショーツを着用して安静椅座位を保ち、直腸温、サーモグラム、体重減少量、血圧、脈拍数、温冷感、快適感の測定を行なった。環境温度条件は、温度 $28 \pm 0.5^{\circ}\text{C}$ 、湿度 $50 \pm 10\%$ とし、本条件下90分間滞在した際の生理反応をコントロールとした。

結果 1. 加温により皮膚温は、前額で $1 \sim 2^{\circ}\text{C}$ 下降、四肢部で $0.5 \sim 4^{\circ}\text{C}$ 上昇し、平均皮膚温は 0.5°C 前後の上昇を示した。水温 41°C では、 38°C に比較して体温はやや上昇、血圧は低下、心拍数は増加して、温冷感は「暖い側」に変化した。浴剤は体温、皮膚温上昇の効果を示すが水温による交互作用がみられた。2. 加温終了後は、時間経過に伴い皮膚温は前額で $1 \sim 2^{\circ}\text{C}$ 上昇、四肢部で $0.5 \sim 2^{\circ}\text{C}$ 下降し、平均皮膚温、温冷感は下降した。これらは水温 41°C の方がいずれも顕著な傾向にあり、時間経過および水温の効果に有意差が認められた。体温、血圧の時間経過に伴う変化は僅少であるが、血圧は浴剤ありの方が有意に高く、心拍数はわずかに下降した。水分蒸発量はコントロール時の $1 \sim 2$ 倍に増加し、水温 41°C の方が多い傾向を示した。3. 冷え症自覚者群は、健常者群に較べ、加温、加温終了後の心拍数が低く、四肢部皮膚温が著しく低下する傾向を示した。